

EXPRESSION-LESS

【登場人物】

深川十和子 (29) 介護士
佐々木英吉 (56) 元大工
久我陵介 (36) 医者
佐々木恵理 (50) 英吉の亡き妻

深川家に住んでいる老人たち

時子 (87)
セキ (94)
修平 (88)
小春 (85)
喜久二 (86)
常松 (90)
みどり (89)
ふや (88)
茂 (87)
マツ江 (84)

○ 深川家・リビング（朝）

賑やかにお喋りしながら朝食を取る二名のお年寄りたち。

皆80歳オーバーの高齢者ばかり。

たったひとりで介護する若い女性。――

深川十和子（29）。

食事を介助する動きは、無駄がなく完璧だ。

そして十和子は、作り物のような笑顔を浮かべている。

○ 公園・ベンチ

ベンチにて、座ったまま眠っている佐々

木英吉（88）。

英吉の目から、一筋の涙。

英吉の身なりはみすぼらしく、顔色も不健康にどす黒く、頬はこけている。

傍らには、病院の処方薬の袋と、ワンカップ酒。

するとそこに、ハーレーダビッドソンが

停車する。

降り立つ革ジャン姿の男、久我陵介

(36)。

陵介「……(英吉見て)」

陵介はスマホを取り出すと、どこかへ電
話かける。

×

×

×

車イスを押した十和子が現れる。

作り物の笑顔は消え去り、能面のように

無表情な顔。

陵介「朝から悪いね、十和ちゃん」

十和子、苦しそうに横たわる英吉を見つ
める。

十和子「……(感情無く)」

○深川家・外観

武家屋敷のように立派な門構え。門の奥
に大きく立派な平屋がある。

純和風な門構えと不釣り合いな近代建築

で、住宅というより、何かの施設のように。
眠る英吉を車いすに乗せ、十和子が戻つて来る。

横に付き添う陵介。

十和子「（振り返り）ここで大丈夫ですが」

陵介「一応、医者診断がいるでしょ」

○同・個室

ベッドに横たわる英吉、目を覚ます。

ベッドを取り囲む、たくさんの老人たち。

英吉、好奇の目で見つめてくる老人たちを見て。

英吉「……（眩き）あの世ってのは、ジジババしかいねえんだな」

十和子、陵介、入る。十和子の手にはコップの入った水。

十和子「お目覚めになりましたか」

十和子、コップを英吉の傍のミニテーブルに置き、

十和子「お加減はいかがですか？」

笑顔で英吉を見つめる十和子。

○タイトル「EXPRESSION-LESS」

○同・個室

十和子、陵介、英吉がいる。

十和子「私、深川十和子と申します。ここで身寄りのないお年よりのお世話をしている者です」

英吉「なんでここに」

十和子「公園で倒れておられたので」

英吉「勝手なことすんな。世話になる金はない」

十和子「お金はいただいております」

英吉「あ？」

十和子「祖母の遺産で運営しております。この場所も、公的な介護施設ではなく、祖母から相続した私の自宅です」

英吉「……」

十和子「ご心配なく。介護士の資格も持って

います」

英吉「他の介護士は？」

十和子「いません」

英吉「わけがわからん。帰る」

英吉、立ち上がろうとするが、立ち眩みのようによろめく。

陵介、英吉を支えて。

陵介「まだ動かない方がいいです」

英吉「あんたも誰だ」

陵介「彼女の友人の、久我陵介です。あと、こう見えて医者です」

英吉「医者？ そのふざけたカッコでか？」

陵介「白衣だと威圧感ありません？」

英吉「そのカッコもな」

陵介「怖がらせました？」

英吉「舐めるな、若造が！」

十和子が笑顔を崩さずに、

十和子「どうか遠慮なさらず、ここにいてください。部屋もちょうど空きがありますので」

英吉 「……」

十和子 「（笑顔のまま）？」

英吉 「作り物みたいだな」

十和子 「え？」

英吉 「……その笑顔、気味悪いんだよ」

不機嫌そうに睨む英吉を、作り物の笑顔で見つめる十和子。

二人の視線が交差して――。

○同・廊下（深夜）

廊下の床にマットレスを敷き、その上で寝ている十和子。

廊下を挟む壁に、左右のつずつ、計12のドアが並んでいる。

ドアには1〜12まで番号プレート。

ドアとドアの間の壁にはすべて手すりがある。

十和子の手首には、スマートウォッチのようなものが何本も巻かれている。

スマートウォッチの音に、十和子はパッ

と目を開く。

『7』という数字がついたスマートウォッチが赤く光っている。

十和子、無表情のまま『7』のドアを開け、室内に入る。

○同・7番の部屋

激しく上下するヤスオ(66)の胸。必死で呼吸しているのだ。

その胸元に、指の腹でそっと触れる十和子。

十和子「(笑顔で)もうすぐ楽になりますからね」

○同・リビング(日替・朝)

朝食を食べている老人たち。

自力で食事をする、時子(87)、セキ(94)、

修平(88)、小春(85)、喜久三(86)、常松

(90)、みどり(89)

ふさは女優のようにオシヤレ。

時子はトロピカルな柄のハワイアンスカートを履いている。

修平は、常松やみどりに最近観たニュースについて饒舌に語っている。

黙って食べる小春と喜久三は、認知症カップル。

お互いに食べさせ合い、口を汚しながら、微笑み合っている。

ふさ(88)、茂(87)、マツ江(84)は、手口まで持ち上げることができず、十和子に食事介助されている。

十和子、3人を待たせることも急かすこともなく、手が何本もあるかのような手際の良さ。

合間に、自力組の食べこぼしの処理もしてやりながら。

英吉「……」

英吉は手をつけず、十和子を気味悪そうに見ている。

十和子、食事をしていない英吉に気付き、

英吉のスプーンを取る。

——と、スプーンを十和子からひったつくる英吉。

そのまま黙々と自分で食べ始める英吉。

セキ「十和子さん。今日ヤスオさんは？」

十和子「部屋で眠っていらっしやいます」

セキ「もうじきなのかしら？」

十和子「おそらく。午後、久我先生が診に来られる予定です」

英吉「……（会話聞いて）」

○同・2番の部屋・外

十和子、ノックをして、

十和子「ふささん、入りますよ」

十和子が中へ入った後。

英吉、片麻痺のある足を引きずりながら現れる。

ドアに耳を寄せ、聞き耳を立てる英吉。

英吉「……（疑惑の目で）」

○同・2番の部屋

ふさの体位交換をしながら、話す十和子。

十和子「今日は？」

ふさ「そうね、明るい気分かしら」

十和子「承知しました」

体位交換を終えた十和子、不釣り合いな豪華なメイク箱から、ピンク色の口紅を取り出して見せる。

微笑んで頷くふさ。

十和子の手首に巻かれたスマートウォッチが鳴る。

十和子「（見て）茂さんですね」

ふさ「（十和子の手から口紅を取って）行ってあげて」

十和子「はい」

○同・共通洗面台

十和子、茂のひげを剃っている。

茂、さりげなく手で十和子の臀部に触れている。

十和子「（笑顔で）危ないですよ」

少し離れた場所で、十和子を見ている英吉。

英吉「……あいつ、ほんとに一人で介護してんのか」

○同・玄関口

足を引きずりながら、外に出ようとしている英吉。

ちょうど検診にやってきた陵介、英吉を見つける。

陵介「英吉さん、どちらへ？」

英吉「帰るに決まってるだろうが。こんな薄気味悪い家、早く出てってやる」

陵介「お帰りになるおうちはないはずですが。今朝がた、アパートを追い出されたのですよね？」

英吉「あ？」

陵介「保険証にあったご住所のアパートのお電話番号を調べて、大家さんにお伺いしま

した」

英吉「興信所みてーな真似しやがって」

と、ドアに手をかける。

陵介「野宿ですか？ お体に触ります」

英吉「ほっとけ。どうせ死ぬ」

陵介「……怖いですか？ ここに泊まるのが」

英吉「ふん。気に食わないだけだ。あの女が」

陵介「？（首を傾げる）」

英吉「写真でもへばりつけてるみたいな、ガ

ワだけ作った笑い方でよ」

近寄ってくる陵介。英吉の薄いシャツの

上から乳首とわきの下の間の辺りを抓り

上げる。

英吉「いだだだだだだ！」

陵介、手を離して、

陵介「でしょうね。神経が集まっている場所
ですから」

英吉「何すんだ！」

陵介「十和子さんの笑顔を、否定されたので」

英吉「あ？ 事実だろうが。あの女の笑顔は

嘘っぱちだ」

陵介「そうです。心から笑うことが、彼女にはできないんです」

英吉「あ？」

陵介「今夜は、ここにお泊まり下さい。あなたには、彼女の事情をわかっていただきたい」

屋内に戻っていく陵介。

その背を見つめる英吉。

○同・6番の部屋（深夜）

英吉のベッドに、サイドテーブルを横倒しにして置く陵介。

傍らに立って見ている英吉。

英吉「何やってんだよ？」

陵介「離床センサーを作動させないためです」

英吉「あ？」

陵介「ベッドから英吉さんの体が離れると、十和子さんのスマートウォッチに通知が届いてしまうんです」

陵介、サイドテーブルにシートを掛ける。

○同・7番の部屋・外

少し開いた扉の隙間から、部屋の中を覗く英吉と陵介。

英吉「……」

○同・7番の部屋

いつもの笑顔を浮かべ、ヤスオの手を握っている十和子。

ヤスオは朦朧とする中、薄目で十和子を見て、

十和子「……（笑顔で、ゆっくり頷く）」

ヤスオ、目を閉じて一息を吐くと、動かなくなる。

十和子「ヤスオさん、お疲れさまでした」
握っていたヤスオの手をおろす十和子。
無機物のように、だらりと垂れる手。

十和子、ヤスオの頭をそつと撫でる。笑顔のまま。

英吉の声「殺したんじゃないよな？」

振り返る十和子。英吉が立って見ている。

その横には陵介。

十和子「……老衰です」

英吉「本当は何が目的なんだ？金か？」

英吉、十和子をじっと見る。

英吉「警察に通報してやる！」

陵介「（英吉を押さえ込む）落ち着いてくだ

さい」

英吉「離せ！！ヤブ医者！！」

十和子「……静かにしてください」

十和子、英吉を静かに見つめ、

十和子「ヤスオさんに失礼です」

亡くなったヤスオの頭を優しくなでる十

和子。

英吉「……」

○同・リビング（深夜）

英吉にお茶を出す陵介。

英吉「……失感情症？」

陵介「はい。嬉しい悲しい怖い腹が立つ、人の感情を彼女は知識としては知ってます。でもそれを自分では感じる事ができないんです」

英吉「あんのか？ そんな病気」

陵介「はい。診断を下したのは私の父ですの
で」

英吉「感情がないなら……あの作り物みたいな笑顔はなんなんだよ」

陵介「……自分の、居場所のため」

英吉「は？」

陵介「……笑顔で居つづけければ、人に受け入れてもらえる。彼女はそう思っているのか
もしれません」

英吉「なんだお前、あいつの恋人か？」

陵介「（ふっと笑い）……昔からの知り合い
なんで」

英吉、フンと席を立つ。

英吉「事情ってのは、それか？」

陵介「はい」

英吉「胸糞悪い。笑いたくないのに笑って何の役に立つ？」

陵介「十和子さんの心の傷が癒されます、ほんのわずかでも」

英吉「感情がないなら無表情でいりゃ、いいだろうが。わざわざ嘘ッばちな笑顔、貼り付けるから気持ち悪いんだ」

陵介「気持ち悪い…ですか。少なくともここにいる私たちは、そう思っていないですよ」

英吉「ここは、よってたかってあの女の傷を舐めるための場所か」

陵介「…」

英吉「気に入らないな」

英吉、足を引きずりながら自分の部屋へ戻って行く。

○同・9番の部屋（深夜）

英吉、ベッドに横たわり、1枚の写真を
見ている。

『英ちゃん工務店』という真新しい看板

の掛かったプレハブ小屋の前。

英吉の横に寄り添うように、笑う笑顔の
恵理（妻）の姿。

英吉、うつらうつらし始めて……。

親族1の声「いいお顔」

親族2の声「恵理さんらしいわ」

○（英吉の夢）斎場

親族席の一隅。喪服姿の英吉が、力なく
項垂れて座っている。

佐々木恵理（50）の遺影が飾られている。
穏やかな笑顔。

親族たちが、棺を覗き込んでいる。
英吉、立ち上がって棺に近づく。

英吉、棺を覗き込む。口元に穏やかな笑
みを湛えた恵理の死に顔。

英吉「恵理。その嘘っぱちの笑顔、やめろ」
遺影を見て、

英吉「笑うなっつってんだろ！」
と、遺影を取り、頭上高く振りかざす。

親族たち、ぎよっとする。

英吉、遺影を床に叩きつけようとするが、
すんでのところで思い留まる。

床に膝から崩れ落ち、遺影を胸に抱きし
めて、

英吉「嘘ばっかつきやがって。苦しいなら苦
しいって言えよ！（号泣）」

十和子の声「——英吉さん、英吉さん」

○同・9番の部屋（日替・朝）

はっと目を覚ます英吉。

十和子がカーテンを開けている。

差し込む朝の光。窓の外には美しい青空
が広がる。

十和子「（笑顔で、振り向く）今日はいいお
天気ですね」

英吉「……（妻の笑顔と重なり）」

十和子「？」

十和子、枕の傍に置かれた妻の写真に気
づく。

十和子「……綺麗な人」

英吉「（写真を隠して）用が済んだら出て
つてくれ」

十和子「はい」

○同・中庭

英吉、庭から建物全体をまじまじと眺め
ている。

そこに車椅子を操ってセキがやって来る。

セキ「先客がいるなんて珍しい。私のお気に
入りの場所なんです、ここ（と庭を見る）」

英吉「この家、建て替えたのか知らねえが、

ド素人の仕事だな。バランスも悪いし、ち
ぐはぐだし」

セキ「そう？気にしたことなかったわ」

英吉「……」

英吉、セキをちらつと見て。

英吉「あのヤブ医者から聞いた。あんたもス
テージなんだってな。……で、いつ死ぬ
んだ？」

セキ「レディにぶしつけね。まあ、お医者様にはとつくにお迎えが来ているはずだと言われているわ」

英吉「……惜しくないのか？　こんなところで、あんな変な女に寄り添って残りの人生終わるなんてよ」

セキ「（ふふっと笑い）十和子さんのことが好きですもの」

英吉「……俺は嫌だね。こんな胡散臭い場所で死ぬのは」

セキ「胡散臭くなんかいいわよ。ここは最期まで、皆が寄り添う場所です」

英吉「変人が気休めに、ジジババの相手するだけだろ」

セキ「——ですから、最期まで寄り添うんです。私たちが十和子さんに」

英吉「……（セキを見て）」

セキ「（ふふっと笑い）それにしても。あなたはいつも何かに怒ってますね」

英吉「文句あるかよ」

セキ「一体、何に怒ってらっしゃるの？」

英吉「……」

英吉、セキから建物全体へ目を逸らす。

○同・物置部屋

麻痺の足を引きずりながら、中を物色している英吉。

大きな工具入れを見つけ、中を開ける。

本格的なDIYができそうな工具が一式、入っている。

英吉「……」

○同・廊下

英吉、手すりを工具で壁から引きはがそうとしている。

十和子が来て、

十和子「英吉さん、これは何を」

英吉「リフォームだよ！」

十和子「……リフォーム？」

英吉「リフォームの事なら『英ちゃん工務

店』。豊橋じゃちったあ名が知れてたんだ
ぜ。で、この手すりつけたのは、どこの
業者だ？」

十和子「祖母が呼んだ業者ですが、名前まで
は」

英吉「どうせ電話帳で上から適当に呼んだん
だろ。俺から見りゃ、ド素人の仕事だ！！」
様子を見ているセキ、修平、時子、小春、
喜久三。

修平「英ちゃんはプロの大工か」

時子「どうりで松崎しげるみたいになっ黒な
のね」

十和子「勝手なりフォームは、お控えいただ
きたいです」

十和子が英吉を止めようと手を掴むが、
その手を振り払う英吉。

英吉「俺が使いづらいんだよ！ プロの好き
にさせろ！」

十和子「……」

十和子、いつもの笑顔になり。

十和子「承知しました。それではお任せします。宜しくお願いいたします」

と言つて去つて行く。けつと睨む英吉。

英吉「(ぶつぶつと)自分の家、勝手にいじられても怒らねえのかよ」

車椅子を操つてセキが近寄つてきて、

セキ「あら、十和子さんに怒ってもらいたいですの？」

英吉「(一瞬、言葉に詰まり)邪魔だ！ 下がつてろ」

○同・外観(夜)

夜の闇に包まれている建物。

○同・廊下(夜)

夜になつても、手すりを直し続けている英吉。

金槌の音が響く。両腕にスマートウォッチの本を巻きつけた十和子が来て、

十和子「続きは明日にしてください。皆さん

が眠れません」

英吉「（わざと大声で）わかったよ！」

英吉、工具入れに道具を片づけていく。

手を貸そうとする十和子。

すると英吉、十和子の手首をぐいっと掴んで。

英吉「俺のはどれだ？」

十和子「（〇番のスマートウォッチを示して）こちらです」

英吉「外せ。俺はいらん」

十和子「英吉さんをお守りするのが私の役目です」

英吉「お前なんかには守られるつもりはない（と、強引にスマートウォッチを外そうとする）」

十和子「だめです」

英吉「うるさい！外さんなら、俺は床で寝るぞ」

十和子「……わかりました」

また笑顔に戻り、〇番のスマートウォッチ

チを外してポケットに収め、

十和子「お休みなさいませ」

と、立ち去っていく。

英吉、気分が悪くなり、崩れるように座り込む。

通りかかった修平が近づいてきて介抱する。

修平「ぶっ通しで作業するから。英ちゃん大丈夫か？」

英吉「……触るんじゃねえ！ 平気だこれくらい」

修平「それにしても、英ちゃんやるねえ」

英吉「あ？ 何がだよ」

修平「さっきの十和ちゃん、ちよっと怒ってたよ」

英吉「……ええ？」

○同・リビング（日替・昼）

レクリエーションタイム。

昔の歌のイントロ当てクイズに興じてい

る老人たち。修平が音出し担当。

みどり「(当てて)忘れちゃいやよ」

修平「当たり前！」

「忘れちゃいやよ」が流れる(著作権は切れています)。

声が出せる老人たちは、歌う。声を出せない老人は、ハミングしたり、音楽に合わせて頭を揺らしたりしている。

車椅子組の老人たちの傍らにいる十和子。老人たちが音に乗り過ぎて車椅子からずり落ちそうになるたびに、そつと手を差し伸べてケアしている。

いつもの笑顔で。

○同・廊下

手すりの改修作業をしている英吉。

老人たちの歌う、調子はずれな「忘れちゃいやよ」が聞こえてくる。

英吉「(舌打ち)」

○同・リビング

金槌を持った英吉が怒鳴り込んでくる。

英吉「ジジババ共うるせえ！ 気が散って仕事にならん」

修平、音楽を止める。

修平「英ちゃんもやろうや」

時子「そうよ。仕事ばかりしてたら過労死するわよ」

修平「まあどっちにしろ死ぬんだけどな、ガ

ハハ！」

英吉「お前、先に逝つとくか！」

と、修平に金槌を振り上げる。

十和子、その手を掴んで押さえる。

十和子「英吉さんもご一緒にいかがですか？」

英吉、振りほどこうとするが、びくともしない。十和子の腕力はかなり強いらしい。

英吉「くだらん！ あんたら、こんなクソ退屈な遊びで満足なのかよ」

修平「じゃあ他に何があるってんだ？」

英吉は、にやりとする。

英吉「遊びつて言ったら、これだよ（とパチンコのハンドルを回す真似）」

十和子「……？」

○パチンコ店・店内

英吉の手がパチンコ台のハンドルを回している。

英吉の隣で台に向かっている十和子。

英吉「何でおめーまでついて来んだよ！」

十和子「皆さんの健康をお守りするのが、私の役目なので」

英吉「（舌打ち）隣にいられても盛り下がるだけだ」

十和子「満足したら、帰りましょうね」

英吉「うるせえ」

さらに車椅子組のセキ、常松、みどり、芳子、ふさ、茂、マツ江がそれぞれ台に向かっている。

セキ、常松、みどりは自力でハンドルを

操作。

ふさには時子が、茂には修平が、マツ江には陵介が、それぞれ後ろについて、ハンドルを操作してやっている。

他の客たち、驚いた顔で老人たち一行を見ている。

× × ×

十和子、大当たり連続。

英吉「すげえな。ビギナーズラックだ」

十和子、無表情で、

十和子「壊れたんでしうか？」

英吉「猫に小判か」

十和子の台から玉が溢れそうになる。

セキ「あら？ 小春さんと喜久三さん、どちらへ？」

○同・トイレ・個室ドア前

店員がドアをノックして、

店員「お客様、大丈夫ですか？ お客様？」

十和子が来て店員を押しつけ、

十和子「失礼します。小春さん、喜久三さん、
行きますよー」

ドアが開き、小春と喜久三が手を繋いで
出てくる。

二人とも、肌が艶々と光沢を放っている。

○通り（夕）

セキ、常松、みどりが、自力で車椅子を
進めている。セキが一番先頭。

ふさの車椅子を時子が、茂の車椅子を修
平が、それぞれシルバーカーの代用品の
ように押して進む。

マツ江の車椅子を十和子が押して進む。

小春と喜久三が手をしっかりと繋いで歩く。

英吉が右足を引きずりながら一人で歩く。

十和子「（英吉に）お体に触りますから。そ
ろそろ戻りましょう」

そこに、花火の音。顔を上げる一同。

英吉「お、祭りか！」

行こう行こうと盛り上がる老人たち。

十和子「……ご無理はなさらない方が」

と言うが、老人たちは盛り上がって聞こえていない様子。

○広場

地域のお祭りが開かれている。

さまざまな屋台。客たちの賑わい。

十和子たちの一行も歩いている。

やぐらで、フラダンスサークルの踊りが始まる。

時子「あら素敵。私、フラ習っていたのよ」

と、やぐらに近づいていく。

× × ×

やぐらの上。時子がフラの衣装をつけて、センターで踊っている。楽しそう。

見ている十和子たち。

老人たちは微笑ましげに目を細めている。

英吉「あのバアさん、五割り増しにべっぴんじゃねえか」

と英吉が振り返ると、十和子は無表情。

英吉「……」

十和子「……あ」

十和子、他の老人たちの笑顔を見回して、

十和子「失礼しました。笑うところなんです

ね（と笑顔に）」

といつもの笑顔になる。

十和子「時子さん、綺麗です」

英吉「……（そんな十和子を見て）」

○深川家・2番の部屋（日替・夜）

ベッドに仰向けに横たわっている時子。

手を胸の上で組んでいる。

青白い顔は、微笑んでいるように穏やかな表情。

時子の唇に、丁寧に紅を差す十和子。い

つもの笑顔で。

十和子「フラダンス、素敵でしたよ」

そして顔に白い布をかける。

○同・2番の部屋外

時子に寄り添う十和子を、見つめている
英吉。

○同・廊下（日替・夕方）

手すりの付け替え工事をしている英吉。
壁に飾られている額入りの写真。お祭りのやぐらでフラダンスを踊る時子の姿。
英吉、汗を拭い、壁に手について深く息を吐く。
突然立ち眩みが遅い、床に崩れ落ちる英吉。

そこに陵介が現れて、介抱する。

陵介「本当はもっと安静にしたいんですけどね」

英吉「……なあ、あんたは怖くねえのか？」

陵介「何がですか？」

英吉「自分の大事な女が、自分に、痛い苦しみの悲しいの、何も言わずによ。作り物の笑顔しか見せてくれてねえって」

陵介「そのような経験が、英吉さんはおあり

なんですか？」

英吉「……ねえよ別に」

陵介「……」

英吉、そのまま作業を続ける。

○同・二番の部屋

みどりの腰をマッサージしている十和子。

みどり「もういいよ。ありがとう。楽になっ

た」

十和子「良かったです」

と、いつもの笑顔。

○同・廊下

二番の部屋から出てくる十和子。

壁に飾られている時子のフラダンス写真。

十和子、しばし立ち止まってそれを見る。

無表情で。

英吉の声「悲しいとか、寂しいとか思っ
てんのか？」

振り向くと、工具箱を持った英吉が立つ

ている。

十和子「いえ。笑い顔以外は、鏡を見ながらでない」と自信がなくて」

英吉「悲しい顔を作れるかどうか聞いてんじやねえよ！」

十和子「失礼いたしました（いつもの笑顔になる）」

英吉「笑うな」

十和子「……（無表情に戻る）」

英吉「俺がお前の病気のこと知ってるのは、知ってんだろ？」

十和子「はい」

英吉「だったら怒れよ。感情がわかんねえ人間に、悲しいか寂しいかとか、聞くんじやねえって怒れよ。どう考えたって無神経な質問だろうがよ！」

十和子「難しいことを仰いますね」

英吉、時子の写真を顎で指して、

英吉「怒れよ！ こいつが死んだのは、お前がパチンコ行ってえって言い出したせいだ

って、怒れよ！ 勝手に人の家いじくり回
しやがってって、怒れよ！ 嘘ついてなき
やダメだって思い込んでいる自分に、怒れ
よ！ お前ことそんな風にしちまったなん
もかんもに、怒れよ！！」

十和子、無表情のまま、じっと英吉を見
ている。

英吉、肩で荒く息をしながら、

英吉「ああ、何言っても無駄だよな。もうい
いよ」

と、踵を返す。

十和子「（反射的に）よくないです」

英吉「あ？（と、振り向く）」

十和子「あ」

十和子、無表情で英吉を見たまま、しば
し黙っている。

英吉「なんだよ？ 何がよくないんだよ？」

十和子「……わかりません。でも、何か」

十和子、自分の胸辺りを手で押さえて、

十和子「ここが、今……でも、あの、わかり

ません」

英吉、工具箱を床に置いて、

英吉「ちよつと来い（と、十和子の腕を掴

む）」

十和子「？」

英吉、十和子の手を引っ張って行く。

○高速道路（夕）

車通りは少ない。

レンタカーナンバーの乗用車が一台走っている。

○車内（夕）

ハンドルを握っている英吉。助手席に十和子。

開いた車窓から風が吹き込んでいる。

英吉「自営業なんかやってるとよお、ムカツ腹立つことばかりですよ！ だからって一発ぶんなぐりや片付くってわけでもねえしよお！ どうしても我慢ならねえ時は、

こうやって高速ぶつ放して、叫ぶんだよ！」

英吉、アクセルを踏む。

英吉「ふざけんなー！！」

無表情で英吉を見ている十和子。

強風が髪を乱す。

風の音の中にかき消されないよう、叫び

声で会話する心人。

英吉「お前もやれ！」

十和子「はい？！」

英吉「叫ぶんだよ。ふざけんなー！！」

十和子「ふざけんな」

英吉「声が小さい！ そんなんじゃ届かね

え！！！」

十和子「どこに届けるんですか？」

英吉「知るかそんなもん！ ふざけんな

ー！！ ほら！！」

十和子「（機械的に）ふざけんな」

英吉「俺にじゃねえ！ 前向け、前！」

十和子、前を向いて、無表情のまま、

十和子「ふざけんな」

英吉「ふざけんなー！！！」

十和子「（少し大きく）ふざけんなー」

英吉「ふざけんなー！！！」

十和子「（さらに大きく）ふざけんなー！」

○高速道路（夕）

突っ走る車。

十和子・英吉の声「（絶叫）ふざけんな

ー！！！」

○パーキングエリア・フードコート（夕）

向かい合ってパフェを食べている十和子

と英吉。

英吉「どうだ、グッと来るもん、あったか」

十和子「……分かりません」

英吉「まあ、お前はロボットだもんな」

十和子「分かりませんが、ただ……」

英吉「あ？」

十和子「英吉さんと一緒に過ごせば、分かる

ように、なる気も、しています」

英吉「作り笑顔を止めることからだな、まず

は」

十和子「これですか」

スツと無表情になる十和子。

英吉「良いじゃねえか」

十和子、笑顔に戻し、

十和子「しかしこちらの方が、皆様に怖がられないかと」

英吉「気持ち悪い」

十和子、また無表情に戻る。

十和子「そうですか」

十和子、また笑顔になり、

十和子「ただ介護士という立場上——」

英吉「やかましいわ！」

十和子、無表情に戻り、

十和子「失礼しました」

英吉、パフェを食べ終わる。

英吉「便所、どこだ」

十和子、英吉の後ろを指し、

十和子「あちらです」

英吉、立ち上がる。

十和子、座ったまま、無表情と笑顔を繰り返している。

トイレへ歩く英吉。

その後ろ姿。

○深川家・リビング（夜）

食事が終わった後の様子。

老人たちは、 Δ を見ていたり、車椅子の上でウトウトしていたり、小春と喜久三は例によって触り合っていたり。

陵介が、皿を片づけている。

セキ「珍しいわね、陵介さんが食事の介助なんて」

陵介「ワガママな患者に、急に頼まれまして（と笑う）」

セキ「構いませんわよ、一晩でも二晩でも、我慢できますわ」

みどり「十和ちゃんのためだものねえ」

陵介「そう言っていただけると」

セキ「それにしても先生、懐が深いですわね。」

殿方として」

陵介「何がでしょう？」

セキ「恋敵に、塩を送ってさしあげるなんて」

陵介「はいい？！」

セキ「あら。そういうおつもりでは、ありま

せんでしたの？」

陵介「いやいやいや。さすがにそれは」

セキ「油断してはいけませんわよ。恋愛に年

の差は、関係ありませんから」

陵介「（苦笑）いやあ」

陵介のポケットで、スマホの着信音。

取り出すと、発信者表示は「公衆電話」。

陵介「（出て）どうしたの？…え！？」

○同・パーキングエリア・前（夜）

十和子が公衆電話で話している。

十和子「はい。少し顔色が良くないとは思っ

ていたのですが」

十和子の背後。救急隊員が、担架を担い

でいく様子が見える。

担架から少し覗いている白髪頭。

○深川家・9番の部屋（日替わり）

ベッドの上で目を覚ます英吉。

十和子が顔を覗き込んでいる。

十和子「おはようございます」

十和子、水差しからコップに水を注ぐ。

その間に英吉、話そうと口を開けるが、

声が出ない。

英吉「……」

十和子、コップを英吉に差し出し。

十和子「危うく他の病院に入院させられるところでした」

十和子、英吉の反応を見る。

英吉、黙ってコップを受け取る。

十和子「手すりの件、修平さんに完成まで仕

上げていただきました」

黙ったままの英吉。

十和子「修平さん、『あんな奴、逆に足でま

といだ。俺だけで進めた方が早いんだよ』

と仰ってましたよ」

十和子、英吉の反応を見る。

黙っている英吉。

十和子「言わないんですか？」

英吉「……あ？」

十和子「他の病院で結構だ、修平なんかには、任せられるか」

英吉「お、おれ」

英吉、何か話そうとするが、声が出ず、苦しそう。

英吉、水を飲もうとするが、うまく体を動かせず、コップを震わせている。

十和子、コップを持つ英吉の手を支え。

十和子「英吉さん」

英吉「……」

十和子「……」

○同・中庭（日替わり）

英吉の車椅子を押す十和子。

十和子、傍の花を見て、

十和子「（笑顔で）綺麗に咲いてますよ」

英吉、十和子を睨む。

十和子「失礼しました。つい癖で」

十和子、無表情に戻る。

○同・9番の部屋（日替わり）

陵介、入る。

陵介「診察に参りました」

陵介、体温計を出し、ベッドで横になっ
ている英吉に差し出す。

英吉、何か話そうとしている。

陵介「どうされました？」

英吉、話そうと頑張るが、うまく声が出
ない。

陵介「十和子さん、呼んで来ましようか」

英吉、手を振って否定する。

英吉、何かを書く動作をする。

陵介、カバンからペンを取り、英吉に渡
す。

そして鞆からメモを取り出し、ペン先に近づける。

陵介「書けますか？」

弱い力で何かを書き始めている英吉。

○同・9番の部屋（夜）（日替わり）

手際よく、英吉の体位交換をする十和子。
今度は無表情。

○同・風呂場（夜）（日替わり）

床にビニールシートを敷き、無表情で英吉の髪を切っている十和子。
テルテル坊主のようなエプロンを着けた英吉は、少しやせている。

○同・リビング（日替わり）

無表情で、英吉の食事介助をする十和子。
英吉、さらに痩せている。

○同・9番の部屋（日替わり）

横たわっている英吉。さらに痩せている。

英吉のソファの傍に、水を置く十和子。

十和子、無表情で。

十和子「お水、飲んだ方が良いでしょう」

英吉「……」

十和子「夕食、どのようなものが良いでしょう」

か？」

答えない英吉。

十和子、英吉に微笑んで

十和子「英吉さん？」

英吉も、十和子に微笑む。

十和子「……」

○同・リビング（日替わり）

座ってこめかみを揉んでいる十和子。

湯呑みに茶を入れる、陵介の後ろ姿。

十和子「英吉さん、もう怒らないんです」

陵介「え？」

十和子「私が、笑顔でも」

陵介「（茶を入れたまま）……」

陵介、湯呑みを十和子の目の前に置く。

十和子「ありがとうございます」

陵介「疲れてるでしょ。仮眠を取ったほうが
いい」

十和子「いえ、大丈夫です。いただきます」
と、湯飲みに手を伸ばす。

×

×

×

座ってうたた寝をしている十和子。

傍らに空の湯飲み。

英吉の声「何寝てんだよ。仕事しろ！」

目を覚ます十和子。

血色も肉付きも良くなった英吉が立っ
ている。隣に陵介。後ろに他の老人たちも
揃っている。

十和子「英吉さん？」

陵介「新薬が効いたんだよ」

英吉「見ろ、ついでに麻痺も治った」

と、スタスタと普通に歩いてみせる。

十和子「奇跡ですね」

陵介「奇跡だよ」

十和子、陵介に微笑みを向ける。その笑みは、いつもと違って、自然に顔が綻んだ感じだ。

○パチンコ店・中

十和子、英吉、老人たち、陵介が並んでパチンコを打っている。
英吉が大当たりを出す。
隣の十和子は、玉がちょうど尽きたところ。

十和子、英吉の玉を奪おうとする。
阻止する英吉と、取っ組み合いになる。
十和子も英吉も、ムキになった顔で。
陵介と老人たち、心人を見て笑っている。
その中には、ヤスオと時子もいる。

○広場（夜）

地域のお祭りが開かれている。
屋台で金魚すくいをしている十和子。
すぐに網が破れ、痛癢を起したように、

網を投げ捨てる。

隣で英吉が、笑いながら軽々と金魚をすくっていく。

英吉を睨みつける十和子。

× × ×

フラダンスの音楽が流れる。

広場中の人たちが全員、大きな輪になって、フラダンスを踊りながら回り始める。

英吉と十和子、老人たち、陵介も大笑いしながら踊る。

車椅子の老人たちも、皆、立って踊る。

やぐらの中央で、フラの衣装を着けて優雅に踊っている時子。

○ 高速道路を走る車内（夕）

運転している英吉、助手席に十和子。

十和子・英吉「ふざけるなー！！！」

〽人の表情は、爽快感に満ちている。

○ 深川家・リビング

うたた寝から目を覚ます十和子。

傍らに空の湯飲み。

十和子、夢を見ながら、リビングで座つて寝ていたのだ。

十和子「え」

時計を見て、弾かれたように立ち上がる。

○同・廊下

9番の部屋の前まで走ってきた十和子、ドアを開ける。

○同・6番の部屋・中

室内には、老人たちが全員いて、一斉に十和子のほうを向く。

十和子「皆さん、どうして？」

彼らの隙間から、ベッドが見える。

ベッドに横たわっている英吉らしき胴体。

その枕元に立っている陵介。陵介の体に隠れて、十和子からは英吉の顔が見えない。

んが、笑顔を作る度に、自分を傷つけているのを。人生の最期に、傷ついている十和ちゃんの顔を見たくなかったんだよ」

十和子、手紙に視線を落としたまま、じつと動かない。

老人たち、陵介、静かに十和子を注視している。

十和子「……」

長い間があつて。十和子、紙を下ろす。無表情のまま英吉の遺体を見つめ、肩で荒く呼吸をしている十和子。

英吉は、安らかな笑顔を浮かべているように見える。

○同・リビング（日替わり）

てきぱきと、老人たちの食事介助を行う十和子。無表情で。

一人、新顔の老人が加わっている。半身に麻痺がある様子で、片手だけを使って食べている。

○同・廊下

修平が手すりに掴まりながら歩いている。その後ろを、新顔の老人が同じく手すりに掴まり、片足を引きずりながらついてくる。

修平「どうだ。歩きやすいだろ」

修平、手すりをじっと見つめる。

修平「……」

○高速道路（夜）

車の少ない道。走るレンタカー。

ハンドルを握っているのは十和子。

十和子「……」

レンタカー、徐々に加速していく。

○車内（夜）

どんだんスピードを上げる十和子。無表情のまま。

そのままどんだん走る十和子。

走りながら窓を全開にする。

車内に吹き込む風、十和子の髪を舞い上がらせる。

十和子、真顔のまま、何かを叫ぶが。

十和子「——」

何を叫んでいるかは分からない。

(おわり)